

聖語藏經卷と玄奘三藏

米田雄介

はじめに

聖語藏經卷とは、周知の通り、現在、正倉院事務所において保存管理している經卷のことである。もともと聖語藏經卷は、東大寺の有する經卷であったが、明治二十七年に東大寺は塔頭の一つである尊勝院に保管していた經卷とそれを納めていた經庫を皇室に献納した。東大寺からの献納の經緯については省略するが、經卷の総数は四九五〇余卷に及び、それを収納していた經庫は聖語藏といい、平安時代末から鎌倉時代の初め頃に建立された校倉造である。

經卷が宮内省に移管されると、經庫もまた正倉院の構内に移築された。經庫は校倉造の宝庫、すなわち正倉の東南一〇〇メートル弱、現在の東宝庫の東方二〇メートルのところに北向きに建てられている。經卷は、しばらくは献納以前と同様に經庫に納められていたが、昭和三十七年に西宝庫が完成すると、それより十年前に建設されていた東宝庫に移納して今日に

至っている。

その經卷は、大雑把に言えば、七八三部四九五〇余卷、内訳を見ると、写經と版經に分かれる。写經は隋經八部二二卷、唐經三〇部二二一卷、光明皇后御願經一二七部七五〇卷、称徳天皇御願經一七一部七四二卷、その他、奈良時代の写經一八部二六卷、さらに平安から鎌倉時代の写經が三八〇部二三二八卷ある。一方、版經は寛治二年版經一部八卷、宋版經一二部一一四卷、その他四〇部七五七卷が伝わっている。他に經卷以外の雜書の類が若干伝わっている⁽¹⁾。

ところで本稿で取り上げたいのは聖語藏經卷の中でも唐經であるが、唐經自体を問題にするのではなく、唐国の玄奘三藏法師（六〇二～六六四）によって翻經されたものとの関係について考えてみたいと思う。

その前に、まず確認しておきたいのは、玄奘三藏が天竺から持ち帰った經卷はサンスクリット語で記されていたものであるが、それをどのようにして翻訳したか、すでに専門家の間では常識になっているところもあるが、若干の問題を検討してみたい。

第一に、翻經の時期とその特色について検討してみる。

第二に、翻經の組織について整理し、翻經担当者の種別とそれぞれの役割について指摘してみたい。

第三に、現存する聖語藏經巻を見ていると、玄奘三蔵が翻經に従事していなかったと言われる時期があるが、実はその時期にも翻經されていたと考えざるを得ないものがあるので、その点を指摘してみようと思う。

第四に、聖語藏經巻の中に、玄奘三蔵によって翻經されたそのものが伝わっているのではないか、一步下がっても、玄奘によつて翻訳されたものが弟子によって写され、翻經直後にわが国に将来されているのではないかと思われるものが存在するので、その点を指摘してみたい。

一、玄奘三蔵の翻經の時期と特色

玄奘三蔵の事績については、周知のように早くに『大唐西域記』(A)をはじめ、『大唐故三蔵玄奘法師行狀』(B)、『大慈恩寺三蔵法師伝』(C)、『開元釈教録巻第八』(D)が編纂されており、これらの著作がいずれも玄奘三蔵の在世中か、その示寂後まもなくに、玄奘の弟子らによつて編述されていることから、記述にはかなり信憑性があると考えられている^②。もとより英雄・偉人の伝記には、過大の褒詞が加えられ、事実を越えた大げさな叙述もないわけではないから、利用するものが事績を割り引いて考えておかなくてはならないであろう。

また同時期の著作物とはいえ、著作によつては、事績を潤色しているだ

けではなく、事実において相違していることも全くないわけではない。たとえば玄奘三蔵の示寂年について、(B)は六十五歳とするのに(C)(D)は六十三歳とし、ここには挙げないが六十九歳とする説もある。これなどは一三〇〇年以上も前のこととなると、傍証できる史料が少なく、いずれの説が正しいか決め手に欠けることもある。しかし(A)から(D)の内容を検討し、現在では(C)(D)の六十三歳が通説になっている。なお生没年は洋の東西を問わず誤り易く、かかる年齢の相違があるからといってこれらの諸伝記の記載に信憑性がないということにはならない。以下の叙述はこれらの諸伝記にしたがつて整理することにするが、主として『大慈恩寺三蔵法師伝』(C)、『開元釈教録巻第八』(D)に依拠して検討することにしたい^③。

検討に先立ち、玄奘三蔵の生涯を大別しておくとして三期に分けられる。

玄奘三蔵が十三歳で出家し、貞観三年(六二九)八月に求法の旅に出発するまでを、つまり僧侶としての玄奘の第一期と位置づけておきたい。

ついで長安を出発した玄奘が、さまざまな修行を経て、天竺から長安に帰ってきたのは貞観十九年(六四五)正月二十四日のことであった。この間、実に十五年五ヶ月となるが、この求法の旅の期間を、第二期と見なすことが出来る。

この第二期に、玄奘自身が集めて持ち帰ってきた経巻は、大乗經二四部をはじめ、大乗論一九二部、上座部經律論一四部など、併せて六五七部におよぶ大部なものであった。この外に途中で紛失したものもあるから、それらを含めると、さらに大部の経巻を伝えようとしていたことが解る。

そもそも玄奘が求法の旅に出発したのは、玄奘以前にも多くの仏家による翻經があり、それらを基に様々な解釈がなされていたが、彼にとってそれらの解釈には少なからず疑問があり、それを氷解させるためには、まず正確な原典に接する必要があるとの認識があった。従って天竺から持ち帰った大量の經卷を、順次、中国語に翻經する作業が彼自身に課せられた任務である。その翻經に従事したのが玄奘の活動の第三期となる。

本稿で特に取り上げたいのは、この第三期の翻經の時期である。

しかし言うまでもなく玄奘の翻經作業は個人的なものではなく、いわば国家的プロジェクトと言っても良いものである。かつて彼は国禁を犯して天竺に出国したのであるが、帰国に当たって彼は唐の太宗皇帝に密出国の許しを請う書状を送っている(C、D)。玄奘が求法の旅の間、様々な国で歓待を受け、僧侶としての名声は広く高く諸方に轟いており、もとより唐国にも玄奘の名は知られていたから、玄奘の願いは直ちに皇帝の容れるところとなって無事に帰国することが出来たのである。諸地方においての活動については検討すべき点もあるが省略し、長安に帰って以降の事績を、特に翻經との関係で整理しておこう。

玄奘の活動を国家的なものと考えてるのは、つぎの三点からである。

第一は、玄奘の求法の旅の足跡を『大唐西域記』(A)として太宗皇帝が筆録させている。

第二は、玄奘が翻經するための場所を太宗・高宗両皇帝が提供している。

第三は、玄奘が翻經するために必要とした人材を太宗皇帝の命によって集めている。

以下、その具体的な点について、検討してみよう。

つぎの表、第1表は玄奘三蔵の經典翻經の年月日と翻經した經典名、翻經の場所、翻經協力者名を整理したものである。この表に類似の表は、すでに先学によって作られたものがあるが、一つは後の叙述との関連で掲げておいた方がよいと考えたのと、一部、先学の研究と食い違ふところもあるので、手直しをして掲出することにした。なお本表は、『開元釈教録卷第八』(D)に掲出の翻經一覽(E)をもとにしている。ただこの翻經一覽とは玄奘三蔵の翻經した經卷名、翻經年月日などを記載したものであるが、いまこの一覽がどのような基準で『開元釈教録卷第八』(D)に掲出されているのか明確でない。たとえば經典をいわゆる經律論に分けているとか、翻經年月日順に整理しているわけでもなく、アランダムではないかと思われるような配列になっている(何か原則があるように思うが、いまその配列の原則は不明)。したがってここでは、先学の研究を参照しつつ翻經順に第1表を作成することにした。先学の研究のなかでも、特に桑山正進・袴谷憲昭両氏の『玄奘』(『人物 中国の仏教』大蔵出版)に所収の玄奘の訳出仏典リストを参照したことをお断りしておきたい。⁴⁾

	翻經年月日	經典名	翻經の場所	翻經協力者
39	永徽元年9月26日	諸仏心陀羅尼經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘雲筆受
40	永徽2年正月9日	受持七仏名号所生功德經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
41	永徽2年正月23日	大乘大集地藏十輪經10卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
42	永徽2年4月5日～3年10月20日	阿毘達磨顯宗經40卷	大慈恩寺翻經院	慧朗、嘉尚筆受
43	永徽2年	阿毘達磨俱舍論本頌1卷	大慈恩寺翻經院	元瑜筆受
44	永徽2年5月10日～5年7月27日	阿毘達磨俱舍論30卷	大慈恩寺翻經院	元瑜筆受
45	永徽2年閏9月5日	大乘成業論1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光、大乘雲筆受
46	永徽3年正月16日～3月28日	大乘阿毘達磨集論7卷	大慈恩寺翻經院	大乘光、大乘雲筆受
47	永徽3年4月4日	仏臨涅槃記法住經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
48	永徽4年正月1日～5年7月10日	阿毘達磨順正理論80卷	大慈恩寺翻經院	元瑜筆受
49	永徽5年閏5月18日	大阿羅漢難提蜜多羅所說法住記1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
50	永徽5年6月5日	稱讃大乘功德經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
51	永徽5年9月10日	拔濟苦難陀羅尼經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
52	永徽5年9月27日	八名普密陀羅尼經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘雲筆受
53	永徽5年9月28日	顯無辺仏土功德經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘雲筆受
54	永徽5年9月29日	勝幢臂印陀羅尼經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘雲筆受
55	永徽5年10月10日	持世陀羅尼經1卷	大慈恩寺翻經院	神察筆受
56	顯慶元年3月28日	十一面神呪心經1卷	大慈恩寺翻經院	玄則筆受
57	顯慶元年7月27日～顯慶4年7月3日	阿毘達磨大毘婆沙論200卷	大慈恩寺翻經院	嘉尚、大乘光筆受
58	顯慶2年正月26日～顯慶5年5月7日	阿毘達磨發智論20卷	西京大内順賢閣→玉華寺	玄則筆受
59	顯慶2年12月29日	觀所縁縁論1卷	東都大内麗日殿	大乘光筆受
60	顯慶3年10月8日～13日	入阿毘達磨論2卷	大慈恩寺翻經院	釈詮、嘉尚筆受
61	顯慶4年4月19日	不空罽索神呪心經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
62	顯慶4年7月27日～9月14日	阿毘達磨法蘊足論12卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
63	顯慶4年閏10月	成唯識論10卷	玉華寺雲光殿	大乘基筆受
64	顯慶5年正月1日～龍朔3年10月20日	大般若波羅蜜多經600卷	玉華宮寺玉華殿	大乘光、大乘欽、嘉尚筆受
65	顯慶5年9月1日～10月23日	阿毘達磨品類足論18卷	玉華寺雲光殿	大乘光筆受
66	顯慶5年11月26日～龍朔3年12月29日	阿毘達磨集異門足論20卷	玉華寺明月殿	弘彦、訳(釈カ)詮筆受
67	龍朔元年5月1日	弁中辺論頌1卷	玉華寺嘉寿殿	大乘基筆受
68	龍朔元年5月10日～30日	弁中辺論3卷	玉華寺嘉寿殿	大乘光(雲カ)筆受
69	龍朔元年6月1日	唯識二十論1卷	玉華寺慶福殿	大乘基筆受
70	龍朔元年7月9日	縁起經1卷	玉華寺八桂亭	神昉筆受
71	龍朔2年7月14日	異部宗輪論1卷	玉華寺慶福殿	大乘基筆受
72	龍朔3年6月4日	阿毘達磨界身足論3卷	玉華寺八桂亭	大乘基筆受
73	龍朔3年12月3日～8日	五事毘婆沙論2卷	玉華寺玉華殿	釈詮筆受
74	龍朔3年12月29日	寂照神変三摩地經1卷	玉華寺玉華殿	大乘光筆受
75	麟徳元年正月1日	呪五首經1卷	玉華寺玉華殿	大乘光筆受

〈第1表〉玄奘三蔵の翻經一覽

	翻經年月日	經典名	翻經の場所	翻經協力者
1	貞觀19年5月2日～同20年9月2日	大菩薩藏經20卷	弘福寺翻經院	智証筆受、道宣証文
2	貞觀19年6月10日	顯揚聖教論頌1卷	弘福寺翻經院	弁機筆受
3	貞觀19年7月14日	六門陀羅尼經1卷	弘福寺翻經院	弁機筆受
4	貞觀19年7月15日	仏地經1卷	弘福寺翻經院	弁機筆受
5	貞觀19年10月1日～同20年正月15日	顯揚聖教論20卷	弘福寺翻經院	智証筆受
6	貞觀20年正月17日～閏3月29日	大乘阿毘達磨雜集論16卷	弘福寺翻經院	玄願筆受
7	貞觀20年5月15日～同22年5月15日	瑜伽師地論100卷	弘福寺翻經院	靈会、明潛筆受
8	貞觀21年2月24日	大乘五蘊論1卷	弘福寺翻經院	大乘光筆受
9	貞觀21年3月1日～同23年6月17日	無性造撰大乘論釈10卷	弘福寺翻經院→大慈恩寺	大乘巍、大乘林筆受
10	貞觀21年5月18日～7月13日	解深密經5卷	弘福寺	大乘光筆受
11	貞觀21年8月6日	因明入正理論1卷	弘福寺翻經院	智仁筆受
12	貞觀22年3月20日	天請問經1卷	弘福寺翻經院	弁機筆受
13	貞觀22年5月15日	勝宗十句義論1卷	弘福寺翻經院	靈雋筆受
14	貞觀22年5月29日	唯識三十論1卷	弘福寺翻經院	大乘光筆受
15	貞觀22年10月1日	能斷金剛般若波羅蜜多經1卷	坊州宜君縣玉華宮弘法台	直中書杜行顥筆受
16	貞觀22年11月17日	大乘百法明門論1卷	北闕弘法院	玄忠筆受
17	貞觀22年12月8日～同23年6月17日	世親造撰大乘論釈10卷	北闕弘法院→慈恩寺	大乘巍筆受
18	貞觀22年閏12月26日～同23年6月17日	撰大乘論本3卷	北闕紫微殿西弘法院→慈恩寺	大乘巍筆受
19	貞觀23年正月1日	緣起聖道經1卷	西京北闕內紫微殿右弘法院	大乘光筆受
20	貞觀23年正月15日～8月8日	阿毘達磨識身足論16卷	北闕弘法院→慈恩寺	大乘光筆受
21	貞觀23年2月6日	如來示教勝軍王經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
22	貞觀23年5月18日	甚希有經1卷	終南山翠微宮	大乘欽筆受
23	貞觀23年5月24日	般若波羅蜜多心經1卷	終南山翠微宮	知仁筆受
24	貞觀23年7月15日	菩薩戒羯磨文1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
25	貞觀23年7月18日	王法正理論1卷	大慈恩寺翻經院	大乘林筆受
26	貞觀23年7月19日	最無比經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
27	貞觀23年7月21日	菩薩戒文1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
28	貞觀23年9月8日～9月13日	大乘掌珍論2卷	大慈恩寺翻經院	大乘暉筆受
29	貞觀23年10月3日～11月24日	仏地經論7卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
30	貞觀23年12月25日	因明正理門論本1卷	大慈恩寺翻經院	知仁筆受
31	永徽元年正月1日	稱讚淨土仏撰受經1卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
32	永徽元年2月1日	瑜伽師地論釈1卷	大慈恩寺翻經院	大乘暉筆受
33	永徽元年2月3日～8日	分別緣起初勝法門經2卷	大慈恩寺翻經院	大乘絢筆受
34	永徽元年2月8日～8月1日	說無垢稱經6卷	大慈恩寺翻經院	大乘光筆受
35	永徽元年5月5日	藥師琉璃光如來本願功德經1卷	大慈恩寺翻經院	慧立筆受
36	永徽元年6月10日	広百論本1卷	大慈恩寺翻經院	大乘謙筆受
37	永徽元年6月27日～12月23日	大乘広百論釈論10卷	大慈恩寺翻經院	敬明筆受
38	永徽元年9月10日～11月8日	本事經7卷	大慈恩寺翻經院	靖邁、神昉筆受

玄奘三蔵の翻經が国家的事業であることは、第一に、玄奘の求法の旅を皇帝が編纂させていることである。さきにも述べたように、もともと国禁を犯して国を出た玄奘の事績を皇帝が作らせ、貞觀二十年（六四六）七月に『大唐西域記』（A）として完成しているが、これによっても明らかなくとく、彼の行為はまさに国家的なものとして認められたものであった。

『開元釈教録卷第八』（D）によると、玄奘は七六部一三四七卷の翻經を行っているが、その中には「大唐西域記」一二卷が含まれている。前記のごとく、これ自体は經典ではなく、玄奘の天竺往還の間の、いわば旅行記であり修行記録であるから、翻經一覽から除くべきものである。

さて玄奘三蔵が行った翻經は「大唐西域記」一二卷を除くと、七五部一三三五卷となる。膨大なものであることは言うまでもないが、さきに玄奘が将来したという經典が六五七部であるから、単純に言えば、全部数の一割強しか翻經していないことになる。しかし六五七部の内訳、つまり卷数が何巻あるか明確でないし、玄奘が翻經した經典の中に64「大般若波羅蜜多經」一部六〇〇巻が、また57「阿毘達磨大毘婆沙論」一部二〇〇巻などが含まれているように、一部とは言っても膨大な卷数のものもあるから、このことを考えると、単純に部数でもって全体の何割などと言うことは出来ない^⑤。

このように膨大な經典の翻經を行うに当たって、具体的には後述するが、太宗・高宗の両皇帝は玄奘に翻經を行う場所を提供している。翻經事業が玄奘の独り舞台でないことを示しており、これが国家的事業であることを示す第二点となる。

貞觀十九年（六四五）正月に帰朝した玄奘は、翌二月、洛陽に赴いて太宗に謁したとき、彼は当初、少林寺に処を得て、翻經に従事したいと奏している。ところが太宗皇帝は、かつて穆皇太后のために建立した西京（長安）の弘福寺をもって翻經の処とするべしと定め、同寺院内の禪院を翻經所として玄奘に与えている。

かくして玄奘は、弘福寺翻經所に居を移し、爾来、貞觀十九年五月二日（同二十年九月二日までの間に1「大菩薩藏經」二〇巻の翻經を行い、同二十二年五月二十九日に14「唯識三十論」一卷の翻經を行っているが、ここに至る三年間に、合わせて一四部一七九巻の翻經を行っている。これが玄奘の翻經の第一期と位置づけられる。

ついで貞觀二十二年二月、太宗皇帝は洛陽を離れて玉華宮に幸すると、皇帝は玄奘を同宮に迎えている。従って玄奘は、その年の翻經を皇帝の居る坊州宜君県玉華宮弘法台において行っている。すなわち15「能断金剛般若波羅蜜多經」一卷の翻經を行ったのをはじめ、16「大乘百法明門論」一卷、17「摂大乘論釈」（世親造）一〇巻、18「摂大乘論本」三巻の併せて一五巻の翻經が行われ、翌二十三年正月には19「縁起聖道經」一卷、20「阿毘達磨識身足論」一六巻の併せて一七巻、従って玉華宮弘法台、北闕弘法院とも記すが、同所において都合三三巻の翻經を行っている。もっともこの経巻のうち、18「摂大乘論本」三巻と20「阿毘達磨識身足論」一六巻は、北闕弘法院から大慈恩寺翻經院に翻經の場所を移動しているが、しかし翻經自体は中断することなく引き続き行われているのである。なお玄奘が大慈恩寺に移ったのは貞觀二十二年十二月であるから、北闕弘法院から大慈

恩寺翻經院へ翻經の場所を移したのはそれ以後のことである。玄奘の翻經活動の第二期は、この北闕弘法院の時代である。

玄奘の翻經活動がもつとも長期且つ活発に行われたのは、大慈恩寺翻經院においてである。第1表を見ると分かるように、大慈恩寺翻經院における翻經は貞觀二十三年二月の21「如来示教勝軍王經」一卷、同年七月十五日の24「菩薩戒羯磨文」一卷から顯慶四年（六五九）七月に完了の57「阿毘達磨大毘婆沙論」二〇〇巻に至る十年間の翻經、さらにまた顯慶三年十月八日に始まった60「入阿毘達磨論」二巻から顯慶四年九月十四日に完了の62「阿毘達磨法蘊足論」一二巻までの一年間の翻經と、併せて三七部四五九巻に及んでいる。玄奘の翻經の仕事のなかではもつとも多くの翻經が行われた時期であつて、玄奘にとっては黄金の第三期といえる。

さらに玄奘は玉華寺において63「成唯識論」一〇巻以下、75「呪五首經」一巻に至る一三部六六二巻の翻經を行っている。この時期を第四期と考えたい。

以上のように、玄奘の翻經の場所は大きく分けて、弘福寺、北闕弘法院、大慈恩寺、玉華寺に分かれているが、各時期の翻經が完全に時期を異にして行われているのではなく、一部の経巻であるが、同時期に別のところで平行して翻經が行われていることも考えておかねばならないのは言うまでもない。

二、翻經の組織

玄奘は天竺から将来した經典のうち七五部一三三五巻の翻經を行ったが、同時期に複数の場所で翻經が行われていることから見ると、玄奘ひとりで翻經したのではなく、多くの協力者がいたことがわかる。実際に『開元釈教録巻第八』（D）によると、玄奘は翻經に要する人員の確保を太宗皇帝に申請し、皇帝はかつて穆皇太后のために建立しておいた京の弘福寺において翻經を行わせようとして、同地に証義・綴文・字学・証梵語梵文に従事する人々を集め、翻經に着手させている。これが玄奘の活動を国家的なものと見る第三の理由である。

つぎに掲出の第2表は、太宗皇帝が翻經のために全国から招集した僧侶とそれぞれの担当を表にしたものである。なお後の便宜のために、翻經に参画した僧侶に番号を付しておいたが、特に座次などの序列を示すものではない。なおこの表では、『大慈恩寺三藏法師伝巻六』（C）と『開元釈教録巻第八』（D）の両文献をもとに整理している。人名の末尾に両文献の略号（CまたはD）を付しておいた。

以上によると、特定の寺院の僧侶だけではなく、全国から当代の碩学が集められたことがわかる。

ここで二点注意しておこう。第一点は、これらの人たちは、玄奘が翻經をはじめた当初に、この事業に参画した人たちであつて、その後に本事業に参加した人たちの名を全て書き上げているわけではない。

〈第2表〉玄奘三蔵の翻經当初の組織

担 当	人 名
証 義	1 京弘福寺沙門靈閏 2 同沙門文備 3 羅漢寺沙門慧貴 4 實際寺沙門明琰 5 宝昌寺沙門法祥 6 静法寺沙門普賢 7 法海寺沙門神昉 8 廓洲法講寺沙門道深 9 汴洲演覺寺沙門玄忠 10 蒲洲普救寺沙門神泰 11 綿洲振響寺沙門敬明 (以上、C、D) 12 益洲多宝寺沙門道因 (C)
綴 文	13 京普光寺沙門栖玄 14 弘福寺沙門明濬 15 会昌寺沙門辯機 16 終南山豐徳寺沙門道宣 17 簡洲福聚寺沙門靖邁 18 蒲洲普救寺沙門行友 19 棲巖寺沙門道卓 20 幽洲昭仁寺沙門慧立 21 洛洲天宮寺沙門玄則 (以上、C、D)
字 学	22 京大總持寺沙門玄応 (C)、(D)
証梵語梵文	23 京大興善寺沙門玄暮 (C)、(D)

名を抜粋しておこう。

智証 ※弁機 玄頤 靈會 ※明濬 大乘光 大乘巍 大乘林 智仁
 靈雋 直中書杜行顗 ※玄忠 大乘欽 大乘暉 大乘詢 ※慧立 大乘
 謙 ※敬明 ※靖邁 ※神昉 大乘雲 慧朗 嘉尚 元瑜 神察 ※玄

第1表を見ると分

かるように、七五部の翻經名のそれぞれに、翻經協力者として筆受の名が記されている。第2表に筆受のことが見えないが、第1表によると、筆受はほとんどの翻經に参加しているから、翻經中ではかなり重要な役割を担っているものと考えられるが、なぜ筆受のことが見えないのであろうか。そのことを考える前に、第1表に見える筆受者の

則 釈詮 大乘基 弘彦

右の人名の頭に※の記号を付しておいたのは、本事業の創設当初に各地から集められた人々たちであるが、本事業の完成まで彼らが従事していた訳ではなく、また創設当初は第2表に見えた僧侶によったが、その後、さらに新たな人々が参加しているであろうことは推測に難くない。おそらく※の記号の付いていない人の中に、後日にこの事業に参加した人が少なくないと思われる。そのことはつぎに明らかになる。

第二に、第1表によると、翻經協力者（主として筆受）として各経毎に一〇二名の名が記されているが、経巻毎の翻經の協力者は、一〇二名だけではなく、それ以上の人々が関与していることである。第2表によると、筆受のことは見えないが、二三名の僧侶の名前が見える。ところでこの二三名は玄奘三蔵が開始した別々の經典の翻經に関わっているのではなく、同じ經典の翻經に関わっている人々たちである。

たとえば『大正新脩大藏經』所収の「大乘大集地藏十輪經」（永徽二年正月〇六月に翻經）巻第一の末尾を見ると、一五名の僧侶が翻經に参加しているのがわかる。いまそれらの人々を第3表に整理した。なお表中の人名に付した番号は、第2表で証義・綴文として紹介したときの番号である。

第3表によると、証義七人、筆受三人、正字二人、証文三人の名が見えるが、第2表に見えた綴文のことが見えない。「大乘大集地藏十輪經」は全体で一〇巻である。それだけの経を翻經するには、さきに見た専門家が集まって、それぞれの立場で英知を絞る必要があったのであろう。詳しくは後に述べるが、「大乘大集地藏十輪經」の翻經に綴文の役を担う人がいな

〈第3表〉大乗大集地蔵十輪經の翻經組織

担 当	人 名		
証 義	2 弘福寺沙門文備	10 蒲洲棲巖寺沙門神泰	8 廓洲法講寺沙門道深
	5 宝昌寺沙門法祥	3 羅漢寺沙門慧貴	實際寺沙門道明
	大總持寺沙門道洪		
筆 受	大慈恩寺沙門大乘光 7 法海寺沙門神昉 大總持寺沙門道観		
正 字	14 弘福寺沙門明濬 22 大總持寺沙門玄応		
証 文	18 蒲洲普救寺沙門行友 普光寺沙門道智 9 汴洲真諦寺沙門玄忠		

くても良いと言うことではないと思われるから、本經の翻訳には綴文に当たる人が右の四種の証義・筆受・正字・証文の中に含まれているのではないかと考えられる。

ところで玄奘三藏の主宰した翻經事業に参加した僧侶名は、現存するいくつかの經卷の識語からも判明する。

つぎに掲出の第4表は、池田温編『中国古代写本識語集録』所収の玄奘三藏の翻經になる經卷の識語により、翻經に従事する僧侶名の判明するものを整理し、該当箇所にも○印で表示したものである。^⑦

第4表をもとに三点ばかり問題点を指摘してみよう。

まず第一に気がつくのは、正字と字学は同じものではないかという点である。字学とあるのはイのみであるが、正字は**口ハホヘチ**に見え、具体的な人名で言えば**イ**の字学には玄応とあり、**口ハホヘチ**の正字にも玄応の名が記されている。もっとも**イ**の字学玄応と**口ハホヘ**の正字玄応は大總持寺の僧であるが、**チ**の玄応は大慈恩寺の僧と記し

〈第4表〉玄奘三藏の翻經組織

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ
証 義	○	○	○		○	○		○	○
筆 受		○		○	○	○	○	○	○
正 字		○	○		○	○		○	
字 学	○								
証 文		○		○	○	○	○		
綴 文	○		○					○	○
証梵語梵文	○								
証 梵 語				○	○		○		
証 梵 文			○						
執 筆								○	

備考 本表の**イ**～**リ**は、第2表、第3表および玄奘三藏の翻經による經典中、識語の判明したものうち主要なものを整理して作成した。なおその識語は、池田温編『中国古代写本識語集録』より引用した。

イ＝第2表、**ロ**＝第3表、**ハ**＝大菩薩藏經卷20（貞觀19年5月2日翻經）、**ニ**＝瑜伽師地論卷100（貞觀22年5月15日翻經）、**ホ**＝大菩薩藏經卷3（貞觀22年8月1日翻經）、**ヘ**＝仏地經（貞觀22年8月19日翻經）、**ト**＝能断金剛般若波羅蜜多經（貞觀22年10月1日翻經）、**チ**＝大毘婆沙論卷□（顯慶元年7月27日翻經）、**リ**＝大般若波羅蜜多經卷232（龍朔元年10月20日翻經）

ている。しかしこの玄応は同一人と見なしでも良いと思われるから、正字と字学は同じ役割のものを別の表現で言い表したものと考えられる。^⑧
第二に、証梵語梵文、証梵語、証梵文も同じものを指すと考えられる。表現上の類似性もさることながら、第4表によると、この三者はそれぞれに重複した箇所がないこと、また**イ**の証梵語梵文の大興善寺玄奘と、**ハ**の証梵文に見える大興善寺沙門玄謨は同一人物と考えられる。さらに**ニ**には

証梵語が八名もいるが、その中に弘福寺沙門玄謨の名が見える。大興善寺と弘福寺と所属の違いはあるが、同一人物と見て問題ない。したがって証梵語梵文、証梵語、証梵文は同じ役割を指すと考えて問題ないであろう。

このように見ると、経巻によって名称は異なるが、同じ役割をするものがあることが明らかになったことであろう。

第三に、証文と綴文との関係についても見てみよう。

第4表によると、証文は**ロニホヘト**、綴文は**イハチリ**に見え、重なるところはない。その点を具体的な人名についてみると、たとえば**ハ**に綴文として栖玄、明濬、弁機、道宣、靖邁、行友、道智、玄忠、明濬、玄応の七人が見えるが、**ニ**によると弁機、靖邁、行友、道智、玄忠、明濬、玄応の七人が証文と見える。**ハ**と**ニ**で重なっているのは弁機、靖邁、行友、明濬の四人である。また**チ**に栖玄、静邁、慧立、玄則の四人が綴文と見え、**リ**に玄則、神昉、靖邁の三人が綴文と見えるが、さきの**ニ**に証文として見えた靖邁が**チ**や**リ**では綴文とある。さらに**ヘ**に証文と見えた行友が**チ**では綴文とある。

もう一点、玄奘三蔵が七五部一三三五巻の翻經を行ったが、『開元釈教録巻第八(D)』には翻經名を具体的に記し、何時、何処で翻經したか、また最少限度であるがその翻經に筆受・証文として関わった人名を記している。第1表に整理したところであるが、その中に貞觀十九年五月～九月にかけて行われた大菩薩藏經二〇巻の筆受として智証、また証文には道宣の名が記されているが、その道宣は**イ**に綴文と記されている。このように見ると、証文と綴文は同じ役割を指しているものと考えて良い。

ただ留意しておかなくてはならないのは、翻經に従事する人たちが全て専門化しているのではなく、たとえば証義と筆受とは後に述べるように役割を異にするが、**イ**で証義と記されていた神昉が、**ロ**では筆受として名を留めている。また綴文と正字とも役目を異にするが、**イ**に綴文として見えた明濬は、**ロ**では正字として姿を現している。

このように綴文・証文、あるいは筆受・正字はいずれも仏教学に関する知識を必要とするから、誰がどの役目を果たすかは固定したものではなく、表現を異にすれば、どの役目でもこなすことが求められており、実際にそれぞれの役目を果たすことが出来たのであろう。

それではつぎに証義・綴文、あるいは筆受などの意味について個別に考えてみよう。実はこれらの言葉について、すでに先学によって説明されているが、子細に見ると混乱があるように思われるからである。⁽⁹⁾

最初に証義について見てみよう。証義は**イロハホヘチリ**のいずれにも見える。もともと**ニト**には見えないが、一般に証義は法会などの際に行われる論議に問者と講者の問答の是非を判断する役目の人を指す言葉であるから、ここでは經典の翻訳に当たって用いる言葉が適切であるかどうかを判断する役割を持つ人であると見なすことが出来る。

つぎに綴文を見てみよう。綴文は**イハチリ**に見えるが、充てられている文字からも判断できるように、文字通り文を綴るのを任務とする者のことで、一説に、サンスクリットと中国語とでは文法が異なり出入りや錯誤が出るので、それをうまく配合して訳文に統一を与え、格調高い文章に仕上げるのが綴文の役割だとされる。さきに綴文は証文でもあると述べたが、

証文もその言葉から連想されるように、翻經に当たって文章が適切に記されているかどうかを証するのであろう。

正字は漢字が的確に用いられているかどうかを確認するもので、さきに指摘のように字学と記されることもある。

証梵語梵文は証梵文、証梵語と同じものであることは前記の通りである。そして字配りからも判るように、証梵語梵文は梵語梵文を証することである。正しくサンスクリット語が解釈されているか否かをチェックするのである。一説に、原語に対し適切な音写文字を決める役と言われているが、翻經に相応しい文字が充てられているかどうかを見極める役目を担っているのではあるまいか。

最後に筆受について整理しておこう。筆受は**口ニボヘトチリ**とほとんどのものに見えるが、一部、**イハ**には見えない。筆受とは口述されたものを筆記するのを任とするもののことと考えられるから、翻經の際には必要とするものと考えられる。実際に『開元釈教録卷第八』(D)所収の翻經一覽(E)Ⅱ第1表によると、七五部の経卷のすべてに筆受者の名が記されている。ところがさきにも紹介したが、『開元釈教録卷第八』(D)所収の「大菩薩藏經」二〇卷には筆受として智証、証文には道宣の名が記されているが、その他の経卷にはいずれも筆受一〇二名しか記されていない。従ってこの経卷が特殊なケースであることが解るが、実は「大菩薩藏經」卷二十の識語によると、道宣は綴文と記されている。さきに綴文は証文と同じ意味で用いられていると指摘しておいたことに留意すると、筆受の役割を担っているが、実際には別の任務を担当しており、その任務に基づいて経卷

の識語に記載されているのではあるまいか。

翻經の組織について整理したが、つぎに翻經の期間についてまとめておこう。

第1表によると、経卷の翻訳は7「瑜伽師地論」一〇〇卷のように、貞觀二十年(六四六)五月十五日〜貞觀二十二年五月十五日までの丸二年を要しており、57「阿毘達磨大毘婆沙論」二〇〇卷は顯慶元年(六五六)七月二十七日〜顯慶四年七月三日までの三年を要している。さらに64「大般若波羅蜜多經」六〇〇卷の翻訳は、顯慶五年(六六〇)正月元旦〜龍朔三年(六六三)十月二十日までの三年十ヶ月におよんでいる。このように二年から三四年近くもかけて完成させたものもある。その一方で、2「顯揚聖教論頌」一卷は貞觀十九年六月十日に、3「六門陀羅尼經」一卷は同年七月十四日に、4「仏地經」一卷はその翌日にと、いずれも一日だけで翻訳作業が行われている。

このように翻經に数年を要したもの、一日だけのものなどあるが、数年を要しているものを見ると、当然ながら卷数の多い経卷である。しかしそれにしても、二、三年という短期間で翻訳しているのには驚く。その点を別の角度から言えば、玄奘が貞觀十九年(六四五)五月二日に1「大菩薩藏經」二〇卷の翻經に着手し、最後の75「呪五首經」一卷の翻經を行ったのが麟徳元年(六六四)正月元旦であるから、翻經期間はほぼ十八年七ヶ月に及んでいる。この間に、玄奘が翻訳した経卷は総数で一三三五卷であるから、一ヶ月に五卷から六卷を翻訳していることになる。

実際問題として、このように短期間で翻訳作業が可能かどうかさえも疑

いたくなるが、玄奘の翻經チームに加わっている僧侶たちは全国から集められた碩学であるから不可能ではないと思われるし、大部の經卷の場合には、二〇人前後の僧侶が参画し、証義や綴文の作業を分担し、効率的に作業が行われていたものと思われる。それにしても、超人的な速さで翻經が行われている。

三、玄奘三藏の翻經と聖語藏の經卷

聖語藏に伝来の唐經は三〇部二二卷あるが、このうち玄奘三藏の翻經になるのは、つぎの經典である。

大乘大集地藏十輪經	一卷	(もとは一〇卷)
大毘婆沙論	二卷	(もとは二〇〇卷)
成唯識論	一卷	(もとは一〇卷)
解深密經	四卷	(もとは五卷)
顯揚聖教論	一〇卷	(もとは二〇卷)
大乘阿毘達磨雜集論	五卷	(もとは一六卷)
說無垢稱經	一卷	(もとは一〇卷)
分別緣起初勝法門經	一卷	(もとは二卷)
能断金剛般若波羅蜜多經	二卷	(もとも一巻)

以上、九部二六卷である。

これらが唐經であることは料紙の紙質を調査すると明らかになるが、残念なことに、どの經卷も完結したものとしては残っておらず、大部の經卷

の中から、一卷、二卷といった形でしか伝わっていない。「顯揚聖教論」のように一〇巻も残っているのは、まことに希有な例ということになる(それでも半分しか残っていない)。

ところでこれらの經卷を見ていると、玄奘三藏の翻經についての既往の研究に若干訂正を要するものがあるのに気づく。

玄奘三藏は天竺から帰国した後、直ちに翻經に着手し、爾後、十八年七ヶ月という長期にわたってほとんど空白を置くことなく翻經に従事している。しかし永徽六年に翻經が行われていないと言われている。

例えば湯浅康雄氏は、永徽五(六五四)年十月十日に55「持世陀羅尼經」一卷を訳したあと、玄奘の訳經の仕事は突然空白となり、翌永徽六年は全く何もしていないと述べられ、この中絶は何を意味しているのだろうか、と自ら設問を發し、まさにこの年は則天武后が次第に宮中内部で権力を掌握してゆく中で、宮中では様々な陰謀事件が起こり、宮廷が大いに揺れ動いたからであったと言われている¹⁰。

たしかに湯浅氏の言われるように、玄奘が意識するしないに関わらず、彼はその宮廷内の陰謀事件に巻き込まれ、しかも彼自身も病気になることもあって、まさに内憂外患もごも来たるの態であったようである。さらに宮廷の激動は続いており、宮廷内の騒動は顯慶元年(六五六)に持ち越されている。湯浅氏によると、このため玄奘が顯慶元年三月二十八日に56「十一面神呪心經」一卷を訳するまで、二年近く翻經の作業を中断していたとされる。

『開元釈教録卷第八』(D)によると、湯浅氏の言われるように、永徽六

年に翻經が行われたとの記述は見あたらない。しかし本当に永徽六年に玄奘三蔵は何もしなかったのであらうか。

たとえば『大慈恩寺三蔵法師伝卷六』(C)によると、永徽六年夏五月に法師以正訳之余、又訳理門論、又先於弘福寺訳因明論、と記している。

理門論は正式には因明正理門論といい、すでに貞観二十三年十二月二十五日に翻經したことがある。このことから、本經は二度訳されているのではなく、かつて貞観二十三年に訳されたものが、何かの都合で永徽六年に訳されたかのごとくに記されているのであるとの説がある。¹¹つまり訳出年にこれほどの開きがあるのは、どちらかが誤っているからで、それは永徽六年の翻經に問題があると解釈しているように見える。たしかに因明正理門論は貞観二十三年に訳されているが、「法師以正訳之余、又訳理門論」とある文を仔細に見ると、玄奘は正訳の余に理門論を訳したとあるのであって、先の翻經を踏まえて、正訳つまり勅詔によったもののほかに、また理門論を訳したと読めるのではあるまいか。もしその解釈が認められるならば、貞観二十三年に一度訳したが、改めてまた翻經を行ったと解釈することが出来る。

ところで玄奘三蔵が永徽六年に翻經を行っていたことは、別の文献からも確認することが出来る。さきにも紹介したが、池田温氏の収集になる經卷の末尾の識語によると、

参537俱舍論卷三訳記

説一切有部俱舍論卷第三

永徽六年五月廿五日大慈恩寺翻經院三蔵法師玄奘奉 詔訳

大総持寺 沙門 玄瑜 筆 受

とある。これは正倉院聖語蔵に所蔵のものであるが、またつぎに紹介するのは、石山寺に所蔵されているものである。

参538俱舍論卷四訳記

説一切有部俱舍論卷第四

永徽六年五月廿日大慈恩寺翻經院三蔵法師玄奘奉 詔訳

右の俱舍論の卷三と卷四は、もとは僚卷であったと考えられるが、これによると、少なくともこの二巻については、永徽六年に翻經されていることになる。このように考えてよければ、永徽六年に玄奘は何もしなかったのではなく、普通どおりに翻經に従事していたと考えざるを得ないのではあるまいか。

さらにもう一例、確実な例を挙げておこう。

第1表によると、57「阿毘達磨大毘婆沙論」二〇〇巻の翻經が顯慶元年七月二十七日から同四年七月三日まで行われたとある。ところが、聖語蔵に伝来の「大毘婆沙論」巻百七十（かつて巻七十としていたが誤り）の巻末奥書を見ると、

永徽六年八月廿日於長安大慈恩寺翻經院三蔵法師玄奘奉 詔訳

洛州天宮寺沙門玄則筆受

とあり、この記載による限り、「阿毘達磨大毘婆沙論」は顯慶元年ではなく、その前年の永徽六年に翻經されていることが確認できる。従って、この資料からも玄奘三蔵は永徽六年は何もしなかったのではなく、57「阿毘達磨

大毘婆沙論」二〇〇巻の翻經に着手していたことが確認できるのである。

四、玄奘三蔵の翻經と入唐僧道昭

本稿の冒頭で、玄奘三蔵のもとで翻經が行われた後、それほどの年月日を経ないで、わが国にもたらされた経巻があるのではないかと思われる述べた。その点について考えるところを記しておこう。

その前に、わが国から中国に渡った人々、特に僧侶について簡単に整理しておこう。

わが国の僧侶で早くに中国に渡ったいわゆる留学僧としては、推古天皇朝に派遣された僧靈雲、大化改新後に唐に派遣された道巖、道光、覚勝、弁正、道昭、定恵、そのほか、ここには全て記すことは出来ないが、多くの入唐僧の名が『日本書紀』や『続日本紀』などに見える。このような僧侶の中で道昭に注目したい。

道昭の卒伝が『続日本紀』の文武天皇四年（七〇〇）三月己未（十日）条に収められている。それによると、道昭（道照にも作る）は河内国丹比郡人、俗姓を船連といい、父は恵釈とあるから、船史恵釈であろう。道昭は白雉四年（六五三）五月入唐学問僧として中国・唐に渡り、間もなく玄奘三蔵に師事したようで、卒伝に「三蔵特愛、令住同房」とあるように、師玄奘三蔵の薫陶を受けていたが、道昭の帰国に当たり、三蔵は舍利・経論を道昭に授けている。卒伝によると、「臨訣、三蔵以所持舍利・経論、咸授和尚而曰、人能弘道、今以斯文附属」と記している。玄奘三蔵が道昭の

尽力によって仏教が東漸することを期待していたことが分かる。その期待に応えて、道昭は、元興寺東南隅に禅院を建ててそこに住し、布教に努めたようである。

『日本三代実録』元慶元年（八七七）十二月十六日条によると、

以禅院寺為元興寺別院、禅院寺者、遣唐留学僧道昭、還此之後、壬戌年三月、創建於本元興寺東南隅、和銅四年八月、移建平城京也、道昭法師本願記曰、真身舍利、一切経論、安置一处、流通万代、以為一切衆生所依之处焉、

とあるように、『三代実録』にも、道昭は帰国後、禅院寺を建てて、帰国の際に玄奘三蔵から贈られた舍利や一切経論を安置し、仏教の流布に努めたと記されている。

『三代実録』によると、その禅院寺は壬戌の年に創建とあるから、天智天皇元年（六六二）に当たる。したがって道昭はその前に帰国していないてはならない。しかし道昭の帰国の時期は不明であるが、天智天皇元年に禅院寺が建立されているところを見ると、斉明天皇七年（六六一）に帰国の遣唐使らと共に帰ってきたものと考えられる。

そのように考えて良ければ、道昭の在唐期間は足かけ八年で、多くの成果を挙げたとはいえ、道昭は玄奘についてまだまだ学ぶべきことがあったに違いない。しかし幸いにも、斉明天皇四年（六五八）、道昭の帰国に先立ち、智通と智達の兩名が入唐し、玄奘のもとに参って修行を行っているから、道昭はさらに学びたいという気持ちを抑え、師玄奘から学ぶべきことは後輩の智通・智達らに託し、道昭自身は帰国して日本国内における布教

に専念しようとしたのではないかと考えられる。

『元亨釈書』巻十六によると

釈智通、齊明四年七月共沙門智達入唐、謁三藏法師玄奘學唯識、白鳳元年三月為僧正、

とある。道昭は在唐中、師玄奘から法相宗の根本を為す唯識を学んでいるが、智通・智達らもまた玄奘三藏から唯識を学んでいる。『日本書紀』齊明天皇四年七月は月条によると、

沙門智通・智達奉勅乘新羅船往大唐國、受無性衆生義於玄奘法師所、とあるから、具体的に「無性衆生義」がどのようなものか不明であるが、智通たちが「無性衆生義」を玄奘について学んだのは道昭の指示によっているかも知れない。



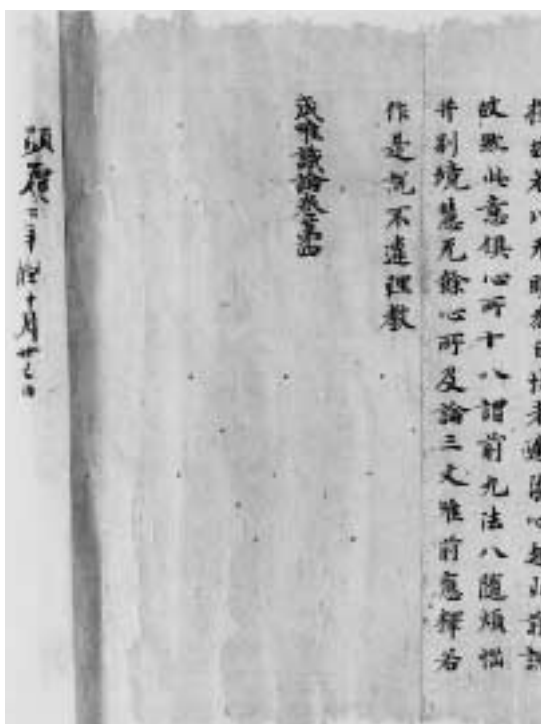
挿図 唐經 第3号 成唯識論 卷4 卷首

以上の点を踏まえて、改めて聖語藏經巻を見ると、唐經の中に「成唯識論」のあることに気づくであろう。もともと「成唯識論」は全体で一〇巻あるが、聖語藏經巻として残っているのは僅かに一卷にすぎない(挿図)。

しかしその一卷は大変に重要な意味を持っている。第1表によると、本経は六十三番目に翻經されたところがあるが、そのことについて桑山正進氏は『玄奘』の中で、「成唯識論」は、

顯慶四年閏十月、『開元錄』はこの年月に訳されたかのごとく記すのみ。日本興福寺僧、真興が安和元年(九六八)に書写した原本奥付によれば、同年(顯慶四)十二月三十日に訳されたとある。訳出過程に問題の多い書である。

と記している。これによると、顯慶四年閏十月に訳出とはいえ、実際にそ



挿図 同上 卷末 紙背墨書

の年の十二月三十日に訳出されたことになる。桑山氏は問題の多い書とされたが、実は大変重要な問題を考えさせる経巻である。

桑山氏の言われるように、顕慶四年閏十月とは、まさに「成唯識論」の翻経が行われていたときで、平安時代の僧真興が興福寺に伝来する古写本を写したとき、その奥書に記されていた顕慶四年十二月三十日とは翻経の完成した日付を表しているのではないかと考えられる。したがって第1表に整理したように、『開元釈教録巻第八』(D)によると、本経の翻経が行われた時期は、顕慶四年閏十月しか確認できなかったが、少なくとも顕慶四年閏十月から同年十二月三十日までの間、翻経作業が行われていたことが確認できるのである。このように興福寺の古写本によって、今まで解らなかったことが解明されたという点で、貴重な記述がなされていたと考えられる。

そのことに関して、さらに注目したいのは、聖語藏に伝わる「成唯識論」は巻四の一巻だけであるが、その巻末紙背に「顕慶四年閏十月廿七日」と墨書されていることである(前掲挿図参照)。かつて本経が正倉院展に出陳されたとき、巻末紙背の墨書が誤って「顕慶六年閏十月廿七日」と紹介されたこともあって、あまりその記述に注目する人はおられなかったが、改めて本経を調査していたところ、「顕慶四年閏十月廿七日」であることが確認できた。

そこでこの「顕慶四年閏十月廿七日」と記されている意味であるが、前記のように、当時は本経の翻経が進行中のことであるから、経巻の巻末紙背に記されている年月日は本経の巻四が完成したことを確認するために記

したものと考えられる。

たとえば後代の人が玄奘の翻経を書写したとすると、このような年月日を経巻の裏に記すことがあるだろうか。普通考えられるのは、玄奘が翻経した年月日を記すとすれば、巻末のいわゆる奥書として、若干の経緯も含めて書かれるはずである。さきに57「阿毘達磨大毘婆沙論」二〇〇巻のうち巻百七十の奥書を紹介したが、まさにそこには、その巻が永徽六年八月二十日に翻経されたことを示す記載が為されていた。

同様のことはその他にもいくつも挙げることが出来る。聖語藏所蔵の天平十二年御願経のひとつに「瑜伽師地論」八〇巻があるが、その巻六十二の巻末に、

貞観廿一年七月卅日於長安弘福寺翻経院三蔵法師玄奘奉 詔訳

弘福寺沙門光筆受

とある。玄奘三蔵による一連の翻経の一つであるが、巻六十二の終了と共に、誰が何時翻経し、筆受したかが解るように記している。同経巻六十三の巻末にも

貞観廿一年八月七日於長安弘福寺翻経院三蔵法師玄奘奉 詔訳

とあり、巻六十四の巻末には

貞観廿一年八月十四日於長安弘福寺翻経院三蔵法師玄奘奉 詔訳

弘福寺沙門光筆受

とある。このように翻経の終わった時点で、それぞれに終了年月日を巻末に記するのが例で、本経の場合、この外にも巻六十九、巻七十一、巻八十六、巻八十九などに同様のことが見える。

ところでそれと共に注意したいのは、たとえば同経の巻四十八の巻末紙背に、

十一月十一日一校 山部花万呂

とあり、同じく巻八十六の巻末紙背には、

韓種麿十一月十七日一校凡国足

などに見える。

これらの事例からも明らかのごとく、翻経が終了した巻については、それぞれ巻末に終了の年月日を記し、併せて誰がそれに関わっているかを明記している。ところがそれとは別に巻末紙背には、この「瑜伽師地論」の場合についていえば、本経を書写した後、その校訂を行った月日や校生の名が記されているのである。つまりここには校訂の記録が記されていることになる。

さてそこで改めて聖語藏に伝わる「成唯識論」巻四の巻末紙背に見える「顕慶四年閏十月廿七日」の墨書の意味であるが、現在巻四の巻末に奥書が記されていないことからすると、この巻末紙背の年月日が「成唯識論」の翻経を行ったときの年月日ということになるのではあるまいか。さきにも述べたように、「成唯識論」の翻経は顕慶四年閏十月から十二月にかけて行われている。まさにその最中の年月日が記されているのである。玄奘三蔵の翻経そのものが伝わっていると考えても良いのではあるまいか。

それでは、この経巻がいつ将来されたのであろうか。八世紀の前半に僧玄昉が中国から帰国するに当たって、経巻五〇〇〇巻を将来したと言われているが『続日本紀』天平十八年六月己亥条、そのことと聖語藏経巻と

は直接結びつかないであろう。また唐僧鑑真が渡来の際に多数の經典を持って来日し、それを内裏に献上したことは『唐大和上東征伝』に見える。それらの中に「大唐西域記」一二巻も含まれていたが、「成唯識論」があつたかどうかは不明である。とするとやはり注目されるのは、僧道昭が帰国に際し、「一切経論」を持ち帰ったとあることである。

かつて石田茂作氏は、道昭が唐から将来した経巻は元興寺禅院に納められ、奈良時代にもそれらは元興寺に伝わっており、天平時代に元興寺から大量の經典が貸し出されているのは、当時としては何よりの善本である道昭将来の経巻であつたからではないかと述べられている¹²。たとえば『大日本古文書』(巻二十四の四四三～四四七頁)所収の「写疏所解」には、大量の経疏が記されているが、それらは禅院寺に伝えられていたものである。その中には、「靖邁師撰菩薩藏經疏」一〇巻、「神泰師疏俱舍論疏」二〇巻、「基法師唯識論疏」一〇巻などが含まれている。靖邁、神泰、基はいずれも玄奘のもとにあって翻経に従事した僧侶で、唐代の代表的仏家である。彼らの注釈書が伝わっているからといって、直ちに道昭がそれらを将来したことはないが、道昭が持ち帰ってきた一切経の中に、これらの経疏も含まれていたのではないかと考えることは、かなり蓋然性があるのであるまいか。

そのような経巻の中の一巻が今、聖語藏に伝わっている「成唯識論」巻四ではないかと推察している。

その推察が正しければ、道昭が帰国したのは、この紙背に記され「成唯識論」巻四に記されていた顕慶四年閏十月二十七日の二年後のことである

から、玄奘が翻経した直後ということになる。とすると道昭は帰国に際し、玄奘から本経典を与えられ、その他の経疏と共に持ち帰ってきたものではないかと考えられよう。いささか大胆に過ぎるとの批判があるかも知れないが、かなりの確率をもってあり得るのではないかと考えている。

むすびにかえて

中国仏教界のみならず、わが国の仏教史の上で燦然と輝く玄奘三蔵の事績について、今更の感がないわけではなかったが、これまでの先学の驥尾に付して、改めてその事績を検証し、また正倉院に伝わる聖語蔵経巻との関係を見てみると、これまで不明であった問題のいくつかについて指摘することが出来たと思う。

その一つについては繰り返さないが、たとえば永徽六年に玄奘は翻経を行っていなかったとの説があるが誤りであると指摘することが出来た。

また聖語蔵経巻の中に、玄奘が翻経したそのものが弟子の道昭によって将来されているのではないかと考えられもののあることも指摘した。もとより玄奘によって翻経されたものは大慈恩寺に納められ、保存されることになっているが、玄奘がもっとも根本的な経巻のひとつとし、道昭もまたわが国の法相宗の確立に最も基本的な経巻と考えていたのが「成唯識論」であろう。仏経の東漸を誰よりも願っている玄奘が愛弟子の帰国に際し、もっとも根本的な経巻を与えたと言うことは考えられないであろうか。

最後になったが、本稿作成に当たり、正倉院事務所調査室長杉本一樹氏

ならびに県立広島女子大学国際文化学部助教丸山浩明氏に、文献の所在などについてご教示頂いた。厚く御礼申し上げる。

注

(1) 奈良帝室博物館正倉院掛編『正倉院聖語蔵経巻目録』による。但し本目録は、事務参考用に作成したものである。なお聖語蔵経巻のうち隋・唐経については、すでに丸善株式会社よりCD・ROM版により刊行された。引き続き聖語蔵経巻は、光明皇后御願経、称徳天皇御願経の順に刊行の予定である。

(2) 『大唐西域記』(A)、『大唐故三蔵玄奘法師行状』(B)、『大慈恩寺三蔵法師伝』(C)、『開元釈教録巻第八』(D)、およびここでは直接取り上げないが、『続高僧伝』巻四、『大慈恩寺沙門玄奘上表記』なども参照した。いずれも『大正新脩大蔵経』本による。

(3) 玄奘三蔵に関する研究は枚挙に遑がないが、近年の研究として、湯浅康雄『玄奘三蔵』(名著出版)、桑山正進・袴谷憲昭『玄奘』(『人物 中国の仏教』大蔵出版)、安田暎胤『玄奘三蔵のシルクロード』(能登印刷出版部、水谷真成訳『大唐西域記』(中国古典文学大系二十二 平凡社)を参照した。

(4) 注(3)の桑山氏の著作による。なお同じく注(3)の安田氏の著作にも類似の表があり、併せて参照させていただいた。

(5) 経巻名の頭に付した番号は、第1表の経巻のそれぞれに付したものである。

(6) これらの場所の中でも、子細に見ると、玉華寺雲光殿、玉華宮寺玉華殿、玉華寺嘉寿殿などの例もあるが、ほとんど同じ場所と考えても良いと思うことから、玉華寺で一括する。

(7) 池田温編『中国古代写本識語集録』（東洋文化研究所叢刊十一 東京大学東洋文化研究所報告）

(8) 池田温編『中国古代写本識語集録』によると、玄奘三蔵の翻經したもののうち、訳場列位の解るものについて具体的な僧名が記されている。それによると、たとえば貞観十九年五月二日に大菩薩藏經卷二十に綴文として翻經に参加している栖巖寺沙門道卓は、同二十二年八月一日に翻經された大菩薩藏經卷三に筆受瑤台寺沙門道卓と見える。この道卓は同一人物と考えられる。同様の例は他にもある。当時の僧侶は生涯同じ寺に住み続けるのではなく、寺を移ることも珍しくない。

(9) たとえば近年の研究、注(3)所収の湯浅・桑山氏らの研究を参照

(10) 湯浅氏注(3)所収の論文

(11) 桑山氏注(3)所収の論文

(12) 『大日本古文書』卷二十四、四四三～四四七頁所収の「写疏所解」（天平十九年十月九日付）、なお石田茂作氏が本文書を紹介されたときは（同氏著『写経より見たる奈良朝仏教の研究』、東洋書林。なお本書は一九八二年に原書房より復刻されている）、『大日本古文書』卷二にっているが、ここでは『大日本古文書』卷二の翻刻に誤りが多いことから、同書卷二十四に改めて収載したものによった。

（県立広島女子大学）